【ブラジル】《ポ語話す孫に沢庵薄く切る》など秀作に感銘

回
句大会

先駆者に黙祷を捧げる大会参加者

「最近はえらい騒がしいようですが、北鮮（北朝鮮）は昔とても良い国でした。野原には桜草、ヒメユリ、鈴蘭がたくさん咲いていました。本当にキレイな国。朝鮮戦争が起きて、とても気の毒。私は朝鮮で生まれましたから、良い句だなと思ってこれを採らせてもらいました」一選者・富重久子さんはそう言って、《北鮮のくすぶる火種終戦日》（西谷律子）を特選に選んだ。

本紙５面に詳細がある通り、第８回文協主催「全伯俳句大会」が２０日、文協会議室で開催され４０人が参加した。その席題の選者評で富重さんは、そうしみじみと述べた。戦後移民には朝鮮や満州、ボルネオなどいわゆる外地生まれが多い。戦後移民を特徴づける句だと痛感した。

選者・小斎棹子さんは《もう歳だ剪定やめや母の言う》（森りつ子）を特選に選んだ。選評で「『やめや』は方言のヤ。年をとった息子に、そろそろ高い場所で剪定したりする作業は危ないから辞めなさい、と心配する母の姿が目に浮かぶ句」と解説。小斎さんは「平凡な日常を改めて見直すのが俳句の極意。母と子の美しい物語がこの作品から感じられる」と評した。

浅海護也さん（７８、愛媛県）は2回目の参加。「女房に薦められて３年前から俳句を始めた。みんな良い句ばっかり。移住者としての証、ブラジルの俳句だと感じる作品が多い」。

俳句歴２０年という柳原貞子さん（８２、大分県）も「いつも俳句のことを考えている。外を歩いていても、普段の生活をしていても、いつも頭の片隅にある。毎朝ジャルジン・ボタニコをジョキングしていますが、その時も。これが私の唯一の健康法」と笑う。身体を動かしながら、頭では俳句を考える。これほど心身共に活性化させる方法はない。